

2022年4月22日

子どもの日本語教育研究会 研究企画委員会 Project-B

## 活動報告 読書会(4) 2022年4月18日実施 『思考と言語 新訳版』 第4章 思考とことばの発生的根源

ヴィゴツキー,レフ.セミョノヴィッチ.著、柴田義松訳(2001)『思考と言語 新訳版』新読書社

プロジェクトBの読書会に参加してから約10ヶ月が経とうとしています。毎回、難解な本を理解するだけでも至難の業ですが、担当章の発表では自分の内容理解の拙さが露呈され、「穴があったら入りたい」ならぬ「オンライン上から逃げ出したい」気分になります。しかし、ハードな筋トレにも似た読書会を通して、思考の筋力がジワジワと鍛えられている(?)と感じます。

第4章「思考とことばの発生的根源」では、「思考」と「ことば」それぞれの出発点と発達路線、その融合である「言語的思考」、さらには外言から内言への発達過程について述べられています。発表後のプロジェクトBのメンバーとの議論を通して、内容が深まったのは以下の箇所です。

内言は、長い機能的・構造的変化の集積を通じて発達する。それは、ことばの社会的機能と自己中心的機能との分化といっしょに、子どもの外言から分岐して生まれる。そして最後に、子どもによって習得される言語構造は、子どもの思考の基本的構造となる。

この内言とともに、思考の発達とことばとの、思考の手段との、子どもの社会的・文化的経験との関連という基本的な、疑いをいれない決定的な事実が現われる。内言の発達は、基本的には外から規定される。子どもの論理の発達は、ピアジェの研究が示すように、子どもの社会化されたことばの直接の機能である。子どもの思考は—この立場を公式化すればこのようになると思うのであるが—思考の社会的手段の習得にともなって、すなわちことばに依存しながら、発達する。(pp.144-145)

ことばが、思考の社会的手段としていかに重要な役割を担っているのか、子どもに向き合う一人の言語教育者として考えさせられました。子どもたちは単なる学習者としてではなく、社会の中で人間として生きていくために、さらには、社会の中で人とともに生きていくために、その一つの手段としてことばを必要としています。引用箇所からは、そのための教育者としての在り方が問われている気がしました。

(高橋)